コリャーク語の形態的特異性と語類画定
—2 つのタイプの副詞節に着目して—

呉人　惠
（北海道立北方民族博物館）

1．はじめに

本発表では，コリャーク語の副詞節を作る 2 つのタイプの形式に着目することで，語類画定の問題点を浮かび上がらせ，その解決策を探る。次がその 2 つのタイプである。

① ＜動詞語幹＋名詞化接辞＋格接辞＞タイプ（以下,「名詞化型」）
e.g. -kena-jtəŋ「～する前に」「～するまで」（-kena 属格，-jtəŋ 方向格）：時間節
-nv-etəŋ/-nv-ə-ŋ/-nv-ə-k「～するために」（-nv「場所」，-etəŋ 方向格，-ŋ 与格，-k 場所格）：目的節

② ＜動詞語幹＋格接辞＞タイプ（以下,「非名詞化型」）
e.g. 場所格 (-k)：時間節，原因節，順接条件節，逆接条件節
道具格 (-e/-a/-te/-ta)：時間節，原因節，様態節
与格 (-ŋ)：様態節，引用節を導く副詞節
共同格 (-ma)，随格 (ɣejqə-/ɣajqə-..-e/-a/-te/-ta)：同時性を表わす時間節

(1) は名詞化型，(2) は非名詞化型の例である。

(1) ʕəm-tal　na-ko-n-etet-aw-ŋəvo-ŋ-ə-n,
bone-crush(ABS.SG)　INV-IPF-CAUS-boil-CAUS-HAB-IPF-E-3SG.P
otɣ-at-kena-jtəŋ.
soft-VBL-GEN-ALL
「彼らは砕いた魚の骨を柔らかくなるまで煮た」

(2) jajt-ə-k,　kəta　t-ewji-k.
return-E-LOC　only　1SG.S-eat-1SG.S
「家に帰ってから，ようやく私は食べた」

先行研究では，名詞化型，非名詞化型の語構成の違いは不問に付し，格接辞を取るという共通点だけで両者を同一の「名詞的動詞 imennye formy glagola」に分類している (Zhukova 1972)。本発表では，むしろ両者の語構成の違いに着目する。

2．非名詞化裸語幹

コリャーク語の語類は，大きく名詞類（名詞＋形容詞），動詞，不変化詞に分類される。しかし, 上の非名詞化型が示す, 動詞の裸語幹が格接辞と結びつくという形態的特異性は, 動詞を名詞類と区別する際に障碍となる。

他の格接辞による例も見ておく。(3) は道具格 (INS)，(4) は与格 (DAT)，(5) は共同格 (COM) の非名詞化型の例である。

(3) am-jəkcav-a,　t-ə-ko-lajv-ə-ŋvo-ŋ　ɣəmɣənqo.
only-hurry-INS　1SG.S-E-IPF-walk-E-HAB-IPF　here.and.there
「私は急いであちこち歩いている」

(4) ŋaje-n　ev-ə-ŋ,　‘ku-tənmet-ə-ŋ.’
that-ABS　say-E-DAT　IPF-cheat-E-IPF
「その人いわく、「あなたは私をだましているのよ」」

(5) en’pic　　ajaʕo-ma,　　t-ə-ku-te-picɣ-ə-ŋ-ə-ŋ.
father(ABS.SG)　hook-COM　1SG.S-E-IPF-make-food-E-make-E-IPF
「父が釣りをしている間、私は食事の支度をしている」

このように斜格接辞と直接結合しうるということから，非名詞化型の裸語幹を果たして動詞語幹と言ってよいのか？あるいは名詞・動詞兼務語幹のようなものなのか？という疑問が生じる。ちなみに，このような非名詞化型は，シベリアでは，コリャーク語を含むチュクチ･カムチャツカ語族, ユピック語, ユカギール語に見られるという (Anderson 2006)。ユピック語では，非名詞化型はシベリア側でのみ観察されていることから，チュクチ・カムチャツカ語族（おそらくチュクチ語）からの影響による可能性がある（呉人 2016）。ユカギール語で非名詞化型とされるのは, 実は, 名詞化接辞 -l が子音始まりの格接辞の前で脱落した結果であるとのとらえ方がある（遠藤 2006，長崎 2013）(6)。

(6) irkid’e　taat　modo-ŋi-de-ge,　irkin　ʃoromo
あるとき　このように　暮らす-PL-(-L)-POSS.3-LOC　1 つの　人
kel-l’el.
来る-IDEV:IND.INTR.3
「あるとき，［彼らが］そのように暮らしていると，1 人の人がやってきた」

（長崎 2013:47）

一方, コリャーク語の非名詞化型は，このように特定の音韻環境で現れるわけではない。理論的にはあらゆる（動詞の？）裸語幹が格接辞と結びつきうるため，特殊事例ととらえることはできない。

語類は,「語根ないし語に対して語彙的に指定されるカテゴリー」（下地 2019:124）（下線は発表者）であるとされる。コリャーク語の場合には，むしろ,「語幹ならびに語に対して語彙的に指定されるカテゴリー」とするのが適切であろう。非名詞化型では，語レベルでの語類画定以前に，語幹レベルでの語類画定が問題になるからである。

では,「語幹ならびに語に対して」どのような手順で語類を指定するのか。結論を先取りすれば，発表者は，コリャーク語の語類画定の基本方針として，語幹レベルと語レベルを区別し，**語幹レベル→語レベルの順に, 形態的基準により語類を画定する**ことを提案する。

3．名詞･動詞兼務語幹 nike/neka との比較

非名詞化型の裸語幹は動詞屈折接辞と直接結びつきうる (e.g. ko-jajt-ə-ŋ「彼は帰っている」［3 人称単数主語・不完了］)。ただし，それだけでは名詞・動詞兼用語幹ではないとする絶対条件にはなりえない。断定するためには，他の名詞・動詞兼務語幹との異同を確認しておく必要がある。ここでは，そのような語幹の一つ nike/neka「何／何をする」を取り上げ，形態的ふるまいを比較する。nike/neka は，ある事物や行為について思い出そうとして思い出せない時, その事物や行為を表す具体的な語彙形式の代わりに使われる (Zhukova 1972)。まず，名詞としてふるまう場合，nike/neka は，非名詞化型同様，自由に斜格を取ることができる。(7) は nike が場所格を取る例である。

(7) nike-k　*internat*-ə-k　muju
what-LOC　boarding.school-E-LOC　1PL.ABS
na-ko-n-awj-an-ŋəvo-la-mək　tewʕel-e.
INV-IPFV-CAUS-eat-CAUS-HAB-PL-1PL.P　dried.fish-INS
「えーとほら何で，寄宿舎学校で，私たちは干し魚で養われていた」

nike/neka はさらに絶対格を取ることもできる。(8) は nike が絶対格双数を取る例である。

(8) nike-t pəlak-ə-t ɣa-mal-qit-ə-linat ləɣan məjew ŋajŋən
what-ABS.DU boot-E-ABS.DU FP-good-freeze-E-3DU.S even because outside
ŋanko qejal'ɣ-ə-cəko jaleko-cʕat-ə-lʕat-ə-k.
there chill-E-inside slide.down.the.hill-DUR-E-DUR-E-LOC
「外は滑るには寒かったので，えーとほら何が，私のブーツが凍ってしまっていた」

一方，非名詞型は (2)(3)(4)(5) で見た通り，斜格は取れるが，絶対格を取ることはできない。絶対格を取るには，名詞化接辞 -ɣəjŋ を介さなければならない（e.g. *jajt-ə-n/jajt-ə-ɣəjŋ-ə-n「帰宅（絶単）」，*ajaʕot-ə-n/ajaʕot-ɣəjŋ-ə-n「釣り（絶単）」）。

一方，動詞としてふるまう場合，nike/neka も非名詞化型も動詞屈折接辞を自由に取ることができる。(9) は nike/neka の 3 人称単数主語・不完了相の例，(10) は (2) の非名詞化型裸語幹 jajt「帰る」の 1 人称単数主語・不完了相の例である。

(9) to ala-k ʕopta əcɣ-in ənn'aq wəjo-tko-ta
and summer-LOC again 3PL-GEN now sling-do.with-INS
ko-neka-ŋvo-la-ŋ ʕopta ləvəcet-ə-k.
IPFV-begin-PL-IPF again compete-E-LOC
「そして，夏にも彼らは投石具で競う時，何した」

(10) t-ə-ko-qaj-lajv-ə-tko-ŋ ʕam t-ə-ko-jajt-ə-ŋ.
1SG.S-E-IPF-little-walk-E-ITR-IPF but 1SG.S-E-IPF-go.home-E-IPF
「私はちょっと歩いて，家に帰った」

すなわち，名詞として認定されるためには，絶対格が取れなければならない。nike/neka は名詞としても動詞としても完全な形態変化をするのに対して，非名詞型は動詞としては完全である一方で，名詞としては不完全であるということになる。ここで初めて，非名詞化型は，名詞・動詞兼務語幹ではなく，動詞語幹であると結論づけられる。

次の手順として語レベルの語類を画定する。すると，非名詞化型は，動詞屈折接辞は標示されないため，動詞は動詞でも**非定形動詞**に分類されることになる。

一方，名詞化型は非名詞化型と異なり，名詞化語幹が絶対格を取れる（e.g. umk-ə-kin「森の（絶単）」）。以上から，名詞型は「名詞的動詞」ではなく，**名詞の格変化形**とみなすのが妥当であると考える。

4．類似の形態的特異性を持つ他形式

以上，名詞化型，非名詞化型の語類画定について再検討を加えた。ところで，形態的特異性のゆえに語類画定が問題となるのは，非名詞化型だけではない。コリャーク語には，異なる語類語幹の接合を許す形式がある。たとえば，「性質形容詞」とされる n-..-qin/-qen は，形容詞のみならず，名詞，動詞，副詞語幹を裸のまま接合させることができる(11)。

(11) n-ə-mejəŋ-qin「大きい」（mejəŋ「大きい (Adj)」）
n-ə-muqe-qin「雨がちの」（muqe「雨 (N)」）
n-ewji-qin「大食漢の」（ewji「食べる (Vi)」）
n-inʕe-qin「早い」（inʕe「早く (Adv)」）

「関係形容詞」とされる-kin/-ken（発表者は「属格」）は，名詞，動詞，副詞語幹を裸のまま接合させることができる (12)。

(12) wejem-kin「川の」（wejem「川 (N)」）
ewji-kin「食べるための」（ewji「食べる(Vi)」）

janot-kin「先頭の」（janot「初めに (Adv)」）

ちなみに，-kin/-ken の k は場所格 -k の可能性がある。n-..-qin/-qen, -kin/-ken も非名詞化型同様，語幹レベルの語類と語レベルの語類を区別して記述する必要がある。コリャーク語において形態的特異性が語類画定に及ぼす影響は決して小さくない。

5．統語的基準を採用しない理由

語類画定には，一般に形態的基準のみならず統語的基準が採用される。ただし，名詞化型，非名詞化型には必ずしも有効ではない。両者とも，定形動詞同様に名詞項を支配することができるためである。(13) は名詞化型，(14) は非名詞化型が自動詞主語を支配している例である。

(13) wejem　qet-ə-kena-jtəŋ,　mət-k-ajaʕo-ŋvo-la-ŋ.
river(ABS.SG)　freeze-E-REL-ALL　1PL.S-IPF-fish-HAB-PL-IPF
「私たちは川が凍るまで釣りをする」

(14) kəta　en’pici-w　wojv-ə-ŋqo　jet-ə-k,　vitku
only　father-ABS.PL　village-E-ABL　come-E-LOC　first
məc-ca-jalɣ-ə-la-ŋ　ŋalvəlʕ-etəŋ.
1S-POT-move-E-PL-POT　reindeer.herd-ALL
「両親が村から戻ってきたら，私たちは群れに移動しよう」

別の例を挙げる。コリャーク語では，名詞が主節述語になると，統語的には定形動詞同様に名詞項を支配することできる（呉人 2011, 2014）。(15)(16) は義務 (deontic) を表わす名詞表現である。-jo-lqəl は本来，「～する予定のもの」，-ɣəjŋ-ə-n「～すること」の意味を表わす。

(15) ɣəcci　ecɣi　va-jo-lqəl-eɣe　ɣ-en’pici-te　jaja-k.
you(ABS.SG)　today　be-NML-to.be-2SG.S　COM-father-COM　house-LOC
「あなたは今日，父と家にいなければならない」

(16) ekil　ənno　an’pec-ə-ŋ　vəʕaj-paje-ɣəjŋ-ə-n.
moreover　3SG.ABS　father-E-DAT　grass-reap-NML-E-3SG.S
「その上，彼は，父親に草刈りをしてやらなければならない」

名詞と動詞が同じような統語的ふるまいをする以上の例から，語類画定には統語的基準が必ずしも有効に働かないことがうかがえる。

6．おわりに

本発表では，コリャーク語の副詞節を形成する名詞化型と非名詞化型の 2 つのタイプの語幹の形態的な違いに着目し，両者ともに「名詞的動詞」とする従来の説に対し，前者を名詞の格変化形，後者を非定形動詞とすべき根拠を論じた。具体的には，語類画定にあたっては，1) 語幹と語のレベルを区別する，2) 形態的基準を優先するという 2 つの方針が重要であることを指摘した。この方針は，名詞化型と非名詞化型の区別以外にも当てはまる。いわゆる「性質形容詞」や「関係形容詞」も同様の形態的特異性を持つ。従来，このような形態的特異性は十分に議論されてきてないが，コリャーク語では，改めてこれらを踏まえた語類画定の在り方が模索されなければならないであろう。

【略語・略号】
ABL=ablative/ABS=absolutive/ALL=allative/CAUS=causative/COM=comitative/DAT=dative/DU=dual/DUR=durative/E=epenthesis/FP=factpredication/GEN=genitive/HAB=habitual/

INS=instrumental/INV=inverse/IPF=imperfect/ITR=iterative/LOC=locative/NML=nominalizer/
P=patient-like argument/POT=potential/S=intransitive subject/SG=singular/VBL=verbalizer

【参考文献】

Anderson, G. D. S. (2006) Towards a Typology of the Siberian Linguistic Area. In Y. Matras, A. McMahon and N. Vincent (eds.) *Linguistic Areas: Convergence in Historical and Typological Perspective*, 266-300. Houndmills: Palgrave Macmillan.

遠藤 史 (2006)『コリマ・ユカギール語の輪郭—フィールドから見る構造と類型』名古屋：三恵社.

呉人 惠 (2011)「コリャーク語の名詞化：動作主・被動作主名詞の意味とシンタックス」『北方言語研究』1:41-62.

呉人 惠 (2014)「コリャーク語における動作名詞と動作主・被動作主名詞—名詞化の度合いに注目して—」『北方言語研究』4: 43-64.

呉人 惠 (2016)「コリャーク語の副詞節：名詞化タイプと非名詞化タイプ」『北方言語研究』13:1-23.

長崎 郁 (2013)「コリマ・ユカギール語の動詞屈折形式：分詞の統語機能と形態」『北方言語研究』3: 41-54.

下地理則 (2019)「品詞」『明解方言学辞典』125-126. 東京：三省堂.

Zhukova, A. N. (1972) *Grammatika korjakskogo jazyka*. Leningrad: Izdatel'stvo «Nauka».